

IV 学級づくりの基本



◇ 安心して間違えたり，思いを語ったりできる学級に

安心して間違えたり，思いを語ったりできる学級，どの子にとっても，居心地のよい，安心感のもてる学級，よりどころとなる学級を実現しましょう。そのために，お互いの存在を認め合い，お互いの持ち味を発揮できる学級づくりを進めましょう。

学級づくりを進めるに当たっては，子どもの成長を理解し，子どもの実態や発達段階に応じて，学級活動の工夫改善・充実を図ることが大切です。

なお，学級づくりではぐくまれる，他者を認め受け入れる人権感覚，他者に働きかける力，チームワーク，自分を見つめる自己認識力，役割を果たす体験と貢献する喜びなどは，キャリア教育で求められるものです。学級づくりは，キャリア教育の視点も踏まえて進めていきましょう。

学級づくりの基本



1 「どんな子どもなのか」 ありのままの子どもを理解！

○子どもと一緒に過ごす時間を大切にして、子どもを理解しましょう。

子どもと一緒に遊び、子どもの話を本気で聴き、共に喜び共に悩むことで、子どもは、先生から自分が大事にされていると感じ、心を開きます。

○子どもを一面的にとらえないで、多面的に温かくとらえていきましょう。

日常の様々な場面で温かな目で子どもの姿を事実としてありのままに見ていくと、その子の内面や背景にあるものが見えてきます。

2 「こんな学級にしたい」 願いは熱く！

○学級づくりへの気概をもち、指導の柱を考え、子どもと共に歩む。

「こんな学級にしたい」という強い気概や信念をもち、「これだけは貫く、譲れない」「こんな活動を作り上げたい」といった「学級づくりの柱」をたてましょう。

3 「こうやって取り組む」 ずくを惜しまず、誠実に！

○子どもの実態や発達段階の特性に応じた学級づくりをしていきましょう。

段 階	子どものとらえと指導のポイント		
小学校	1年	「 幼保小の円滑な接続に配慮しましょう 」幼保小の連絡連携により、子どもの育ちを理解する。学校生活のリズムを身に付けていく。保護者とのつながりは極めて重要。子どもの居場所づくりに全精力。	P59へ
	2年	「 1年生を迎え、上級生としての自信と誇りを育てましょう 」個人差が大きく見られる時期。一人一人の子どもの成長に焦点を当てる。上級生となつての学習や生活への意欲的な取り組みを評価する。	
	3年	「 個のエネルギーの高まりを、新たな学習内容の取り組みにつなげましょう 」自我が外へ向き、自己主張が激しくなる時期。子どもの内面と外面がアンバランスなことを理解した上での指導が重要。	P60へ
	4年	「 話し合い活動の充実などにより、集団活動への意識をもたせましょう 」他者意識を持ちながら集団の一員としての自覚を高める時期。保護者との連携を再確認し、育ちの方向を共通理解する。	
	5年	「 集団の中で生きる自分の行為や行動を見つめる視点を育てましょう 」義務教育9年間の中間点。他人の言動に極めて敏感になり、固定的なグループ関係を作りがち。自己を見つめる視点を大切にする。	P61へ
	6年	「 小学校生活のまとめ。中1ギャップ予防の視点をもった学級経営を心がけましょう 」集団の人間関係の中で自己をコントロールし、他者とのコミュニケーションを円滑に取れることに重点を置く。	
中学校	「 自分たちの手で活動を生み出せる意欲をもった集団に育てましょう 」心身ともに急激な変化が表れる時期。小学校と異なる生活に適應できるような丁寧な対応が必要（中1ギャップに配慮）。個々の子どもの成長を認めながら、カウンセリングマインドで接する。		P62へ

○連携がキーワード。多くの教職員や家庭（保護者）と連携して学級づくりに取り組みましょう。

学級担任一人では解決できないことも出てきます。悩みや課題は一人で抱え込まずに、早めに相談して、多くの教職員との関わりの中で解決の糸口を見つけましょう。

また、家庭とのつながりは大変重要です。問題が起きた時だけ家庭と連絡を取り合うのではなく、普段から子どもたちの良い姿を、学級PTAの懇談時や学級通信などで積極的に発信したり、電話で個々の様子を伝えておいたりすることで、家庭が学級づくりを支えてくれるようになります。個別指導を要する際には、学校での面談や家庭訪問などをして「会って直接話をする」ことが大切です。

小学校低学年

1 発達段階の特徴をとらえて

- この時期の子どもは知的能力の発達や学校などにおける生活経験によって次第に自主性が増し、様々なもの、ひと、こととのかかわりを広げていきます。
- 幼児期の自己中心性はかなり強く残っていますが、他人の立場を認めたり、理解したりする能力も徐々に発達してきます。
- 心に感じたことを思いのままにつぶやいたり、喜びや悲しみ等を体全体で表したりします。また、周りの人たちから受ける愛情や誠実さ等に対しても敏感です。

2 指導のポイント (○は指導のポイント ☆は具体例 以下のページも同様)

学校に行くことが
楽しいと思えるよ
うにしましょう

- この時期の指導で何よりも大事なことは、子どもが『学校に行くことが楽しい』と思えるようにすることです。個に応じた指導を充実する必要があります。
- ☆子どもが安心できる居場所づくり
 - ・一人一人のよさやがんばりをほめる。
 - ・その子の気持ちに寄り添って話を聞く。
 - ・子どもの成長の様子を記録し、確かな育ちを見届ける。

小学校への円滑な
接続に配慮しまし
よう
【1年生】

- 1年生に対しては、幼稚園・保育所からの円滑な接続を図るため、学校での生活リズムを無理なく身に付けられるようにすることが重要です。
- ☆小1プロブレムに配慮した指導
 - ・課題をスモールステップで与え、一つずつ解決する。
 - ・学習内容を工夫して、集中できるようにする。
 - ・幼保小連絡会などで、子どもの姿を通して話し合う機会をもつ。

上級生としての自
信と誇りを育てま
しょう
【2年生】

- 2年生に対しては、『お兄さん、お姉さん』になったことを自覚させるとともに、学習や生活への意欲的な取組を評価していくことが大切です。
- ☆上級生としての意識を育む取組
 - ・1年生との交流の場を設ける。
 - ・1年生に頼られるような体験を位置づける。

協力して子育てに
当たる意識をもち
ましょう
【保護者への対応】

- 保護者は、学校に対する期待と不安を抱えているものです。学校での子どもの様子について分かりやすく伝え、丁寧に対応していくことが必要です。
- ☆学校と家庭との連携
 - ・保護者の子どもに対する期待や願いを温かく受け止める。
 - ・連絡ノートや学級通信などを活用して、子どもの様子を伝える。
 - ・家庭訪問や個別懇談、学級懇談会などで、学習や生活の課題等を話し合う。

小学校中学年

1 発達段階の特徴をとらえて

- 「ギャングエイジ」と呼ばれ、閉鎖的な集団をつくり、仲間だけに通じるルールや約束ごとを形成したがる傾向があります。全体としてのまとまり感に欠け、各々が勝手に行動しているようにも取られがちになります。しかし、後々の人間関係形成力や社会的知識、技能を獲得する力につながるところであり、特性を踏まえた上で適切な支援をする必要があります。
- 一方で、自分や周りの友だちに起こった問題を、集団の力で解決したり、責任分担や集団行動などを確実に رفتたりする力が大きく伸びてくる時期でもあります。このような力を、子どもの主体的な活動を展開することで伸ばす必要があります。

2 指導のポイント

初めての学習内容に、意欲的に取り組めるようにしましょう
【3学年】

- 「おもしろいな」「もっとやってみたいな」「上手になりたいな」などと、意欲的に取り組めるよう、ほめることを中心に支援して、「(自分の力でできた)」という気持ちを味わえるようにすることが大切です。

☆学習への意欲を引き出す支援

- ・子どもたちの興味や関心、取り巻く課題などを的確にとらえる。
- ・一人一人が自らの課題を解決できるような学習展開を工夫する。
- ・子どものよさを認めたり、つまずきを個別に支えたりする。
- ・朝や帰りの会などを利用し、「お話しコーナー」という形で学習に関わった話題を広げる。

話し合い活動が自分たちの力で進めるようにしましょう
【4学年】

- 学級内の問題については、学級会や話し合いの場を設けて、自分たちの力で解決できるようにしましょう。

☆話し合い活動の充実

- ・子どもたちにとって必要感があることを議題にする。
- ・自分たちの力で解決するために、話し合う内容を焦点化する。
- ・司会進行をする子どもとは、事前に綿密な打合せをしておく。
- ・子どもたちのつまずきを見極めた上で、最小限のアドバイスをする。
- ・少数意見を認め、大事にする。

排他的な人間関係に対しても、受容の姿勢を保ちましょう

- 初めから担任の判断を一方向的に押し付けるようなことをせず、その子の願いや思いに傾聴することが大切です。その上で、排斥された子どもの気持ちを直接聴く場を設け、どうするのか意思決定ができるようにしましょう。

☆当事者に対する受容的な支援

- ・当事者を公平に受け入れ、公平に話を聞く。
- ・「自分のことを分かってもらえている」という安心感をもてるようにする。
- ・声かけの例
「〇〇さんと一緒にやりたいんだね。でも、△△さんはどんな気持ちかな」
「どちらも『よかったな』と思えるにはどうしたらいいかな」

開かれた学級づくりに向けて、クラスみんなで取り組める活動を設定しましょう

- 「何でも話せる」「悲しい気持ちも伝え合える」開かれた学級づくりのために、子どもたちが意欲をもち、夢中になって取り組める活動を行うことが大切です。

☆開かれた学級づくりに向けての取組

- ・子どもたちの思いや考えを大事にする。
- ・その子ならではの役割を設ける。
- ・友だちと力を合わせて一つのことに向かう心地よさが味わえるようにする。

小学校高学年

1 発達段階の特徴をとらえて

- 思春期の入り口です。子どもたちの個性が開花し始めます。視野が広がり、自律的な行動ができるようになるので、集団の組織化や活発化が期待できます。
- 相手の立場に立った考えによる行動ができるようになります。反面、自分と他者の能力を比較する意識も高まります。自分のできないことや集団の一員としての存在を否定されることに敏感です。
- 孤立を恐れ、自己防衛のために固定的なグループ関係に固執した小集団が発生することがあります。疑心暗鬼の関係や命令的な上下関係から、深刻な「いじめ」に発展することがあるので、積極的に人間関係を把握することが必要です。

2 指導のポイント

他者と良い関係を作るために、子ども自身が、自分の行為や行動を見つめる視点（ものさし）をもつことが大切です
【5学年】

- 客観性の芽生えとともに親子関係・友人関係・教師との関係に対して敏感になると同時に、身体の変化を意識するようにもなります。養護教諭などの連携が重要です。
 - 高い自己肯定感を維持し安心して生活するために、お互いに認め合い支え合える人間関係作りが一層大切になります。
 - 反社会的な行動や人間関係の問題解決では、教師が裁判官や権力者のような対応をしないことが極めて重要です。子ども自身の危機意識や学級の自浄作用を高めることが大切です。
- ☆ルール・モラル・マナーの違いを考えたりケンカといじめの違いを考えたりすることを通して、規範意識と人権意識を高めましょう。
- ・外部講師の活用・ロールプレイング・構成的グループエンカウンター 等

学年内の連携を密にして、中学校に対する不安を除き、希望をもたせることが中1ギャップの予防(不登校対策)につながります
【6学年】

- 進学に対する希望や不安等について、子どもや家庭の声をしっかり受け止めることが必要です。進学準備は学校と家庭の両輪で行うものと考え、保護者への理解と協力を得ながら進めましょう。
- ☆中学校の教科指導や生徒指導の内容を、教師自身がよく理解しておくことが大切です。
- ・特定の教科で担任交代 ・教科担任制の模擬体験 ・中学校の先生による授業
 - ・児童生徒間交流 ・家庭との連絡を密にできる体制作り 等

子どもの目から見て、教師が心豊かな人間として映ることが重要です。
教師は、児童の理解者であり支援者であるという自覚をもちましょう

- 教師の明るさと温かさは、子どもに安心感を与えます。
 - やらなければならないことばかりが優先的に評価されると、子どもは息苦しさを感ず、自己肯定感の低下を招きます。
 - 子どもは、教師がどの子に対してどのように接するかについて敏感になります。
 - 子どもの悩みや人間関係を、多面的に把握することが大切です。一人一人の良さと課題を把握し、まずはその両面を教師自身が「知る」ことが重要です。
 - 学校生活の様子や実態調査などから見えてきた傾向や特徴を生活指導に活かし、良い面と課題面の両方に対しての指導をバランス良く丁寧に行いましょう。
 - 一見心配な様子が見えない子についても、機会をとらえて声がけをして褒めたり励ましたりすることは、子どもの心の安定に寄与し保護者からの信頼を得ることにつながります。
- ☆いじめアンケートやQ-U等のような調査や検査を行った際は、得た情報を可能な限り多くの教職員と共有し、個別支援の必要な児童への組織的な体制作り役に役立てましょう。
- ・子どもの心を開く（一人一人への声がけや個別的な対話の機会を逃さない）
 - ・積極的な家庭との連携（直接会って話す機会をもつ）

1 発達段階の特徴をとらえて

- 中学生という時期は、人間的にも大きく成長する時期です。しかし、この時期特有の悩みや心の揺れ、不安といった発達課題を抱えており、問題行動も多発する時期です。
- どの生徒にも中1ギャップが生じる可能性があり、予防的な対応が必要になってきます。小学校における生徒指導の内容をふまえ、教師がカウンセリング感覚をもち、生徒の自尊感情を大切にはぐくみながら援助する必要があります。
- 3年間の成長過程を経て、社会生活に十分適応できるようにするとともに、自分を律することのできる心を育成しましょう。

2 指導のポイント

一人一人を伸ばすためにタイミングよく働きかける

学級で取り組むことの楽しさと成就感を味わい、次の活動を自分たちの手で生み出す意欲のある集団に育てる

今はこの段階？次はここまで！個や集団の成長過程を振り返り、次の手だてを考えます

○生活記録でのやりとりや普段の何気ない会話などを通して生徒理解に心がけましょう。

○生徒一人一人の願いや期待を共有するとともに、生徒個々の取組や係活動の良さを逃さず全体に紹介するなど、効果的な支援の方法を工夫しましょう。

○「今、学級はこのことに向けて取り組んでいる」という意識が共有され、生徒が主体的に活動を計画し、実践する集団に育てたいものです。

○個および集団が、今はどのような状態にあるのかを判断する基準をもち、見通しをもって学級経営を進めたいものです。

○行事等への取組過程や終了後に、生徒による相互評価を取り入れるなど、自分たちの実力や課題を意識させることが個や集団の成長につながります。

3 個と集団がともに成長していく段階のとらえと具体的な手だての例

*段階	状態の判断基準
*友に受容され、仲間になれる。教室環境が整い、温かい雰囲気が出てくると、学級を心のよりどころと感じてくる。	気がねなく、素直に自分を表出できる生徒が増えてきたか。
*心情が安定し、友に受容されることにより自己主張が可能になり、周りや集団に働きかけられるようになる。	個の気付きや取組みの良さを取り上げて短学活や学級通信などで広げる手だてが適切であったか。
*働きかけたことが認められ友から感謝されるようになると、自己肯定感や自尊感情が高まる。	集団における自分の役割を意識した発言や行動が多く見られるようになってきたか。
*働きかけを繰り返す中で、成果だけではなく課題も理解し、自分の短所までも含めた自己認識がされるようになる。	学級の成長に果たした役割を互いに評価し、一人一人の伸長につなげる指導ができたか。
*自分の能力・学力のみならず家庭状況や保護者の願いを受け止められた時に、次学年や卒業後の将来等に向けた自己変容の必要感をもつ。	特定の仲間集団の中だけに安息を求めるのではなく、広く他者との意思疎通を図るような行動が見られたか。

たとえばこんな方法で

☆教室壁面に一年間の学校・学級行事を貼り、目標や取組の様子、反省等を、生徒が記入していくように掲示を工夫する。
☆学級通信等で、誕生日に全員の名前の由来を掲載し、互いのかげがえのなさ、尊さを知る。

☆学級に必要な仕事を自分たちで考え、活動方法を工夫する。
☆学級運営委員会などの組織が機能し、自治的な運営が継続されるように指導、助言をする。
☆話し合い活動において、意志を表出することが苦手な生徒に配慮をする。

☆小さくても種々の成功体験を経験させる過程で、個々の生徒の学級への寄与や仲間から認められているという所属感を互いに賞賛する関係をつくっていく。

☆地域体験などのキャリア学習などともかかわらせながら、親をはじめ多くの人の生き方に学ぶ機会をもつ。